

都市化にともなう生活

（意識・形態）の変化

三年次生 社会調査演習

- 一、都市化に棹さす人びと
- 二、農業の変質と兼業
- 三、大都市近郊山村における生活条件の変化
- 四、婚姻儀礼の変容
- 五、子どもの生活としつけ
- 六、住まい・医療・食生活・祭りにみる変化
- 一 都市化に棹さす人びと

「これからはもっと若い者の意見を取り入れていかなくてはいけないだろう。」「ムラにもっとイエが増えてほしい。」日の出町のお年寄りが不安とも期待ともつか

ない面持ちでこう話された。この言葉は、ムラの現状、しいては将来像をも暗示させる言葉ではないだろうか。

ムラは少数の人びとによって、共同体的連帯の維持再生産を、ひとつの完結体として、まとまりのある規範の上に実行してきた。しかし、ムラの人びとの意識の中に、今日に至る変化が現われて来たのは、いったいどこに原因があるのであるか。われわれは都市化という必然的な避けることの出来ない波によるものと考ええる。都市化によるもっとも大きな変化は、人びとの生活の仕方に見られる。ムラの伝統的な生業をすて、町なかに出る若者、祭り他のムラの儀礼的衰退など数えあげると切りがない。これら都市化にともなう生活意識・形態の変化を内と外から考えてみた。

昭和三〇年代以降の高度経済成長政策による日本社会の全般的な変化は、ムラにさまざまな変化をもたらした。例えば、農作業の機械化・都市勤労者の居住などである。しかし、ただ単に外からの力のみ引きづられてムラが変ったとは思われない。そこには内からの対応があったはずである。

この内からの対応として、外の変化に十分即応し得る

世代の出現を考えることが出来る。これは外からの強圧をムラ内でそれとして受けとめうるものであった。例えば、東京近郊日の出町・報徳部落では、青年団の自然消滅を受けて、人びとは『報徳芸能振興会』を組織的に運営しているし、信州宮田村・大久保耕地では、農作業を基として培われてきた秩序が、兼業農家の増大により動揺をきたし、新しい生活規範として『生活改善運動』を実施していることなどである。

ムラはこのように外からも、内からも変化してきた。そして今回の調査で、われわれはこの変化にも地域差のあることを知ることが出来た。具体的には、農村地帯としての大久保耕地と、林業を中心に営まれてきた報徳部落・小和田部落（五日市町）とにおいて、地理的背景、生業の相異、そして人びとの共同的意識より考えることが出来る。このことに、ムラが、どのように都市化を受けとめてきたかを知るのである。

都市化あるいは近代化、民主化、産業化にともなう影響は、地域における人と人との関係に特に大きな変化を与えた。

ムラの共同体的組織は生業に基づいての自給自足が基

礎的なつながりをもって構成されていた。個々のイエの生活は、本家分家関係、隣組などイエ関係での相互扶助、共同作業により、強い結束をもって支えてきた。その結束の強化のために、冠婚葬祭、生活慣習に及んでの共同的が必然的にムラの生活規範としてあった。しかし時代の変遷にともない、現在では、かつての共同体的は、もはや解体してしまっていると考えべきだろう。それにつれて『仲間』生活Ⅱ人と人とのつきあいは、どのように変化して来たのか。そしてそのような変化は、産業構造の変化Ⅱ都市化と深いかわりあいをもっている。

高度経済成長のなかで大久保耕地は、積極的に農業の合理化に取り組み、昭和四四年から『農業構造改善事業Ⅱ』を進めたのである。農業機械の導入が計られ、農作業に費やす労働日数の短縮（現在、年間労働日数は二〇日位とのこと。）と農業収入の安定化が認められた。しかし、農業労働の短縮による残りの時間を、花卉栽培・養豚・牛の飼育などに当てている人は少なく、多くの人がとは村内および近在の事業所、工場へ勤めに出ている。兼業化の進行は、大久保耕地において、もはや農業が生活の基体を形作っていないことを明示している。これま

で農業を媒介として培われてきた仲間生活の規範、ムラの伝統、農行事としての祭り、青年団などが簡略化、消滅してしまった。また、せざるを得なかったであろう。

林業を中心とした共同関係を維持してきた報徳部落も、昭和三〇年代を境として急速に変っていった。三多摩地区への工場誘致の影響を受け、近在の事業所、工場への勤めに出る人びとが急増した。結果、ムラの人びとの林業離れⅡムラ離れが促進されたのである。現在、林業の仕事としては、植樹と山の手入れだけで、切り出し、運搬、加工は材木業者の手によっておこなわれている。林業はごくごく少数の人びとによって専業として担われているにすぎない。かつては、林業のムラとして大部分のイエが林業を家業として、木の切り出し、運搬までを行っていた。そして、同じ職場Ⅱ「営み」に従事していることから、共同意識が、林業を中心に統一的な秩序の基、共同生活を可能にしていたのである。農村地帯に比べると、農地改革の大きな波を受けなかったために、民主化は阻害されてきた、と人びとはいう。しかし現在では報徳部落にも民主的な自治会があり、ムラの運営がおこなわれている。例えば、自治会が組合を

結成し、株主となって『自然休養村』を運営しているのである。民主化へのみちのりにおいて、ムラ中を揺るがせた問題に『分校』問題があった。分校廃止をめぐって、ムラの古い関係と工場勤めに出た人びととの間に生まれた問題であり、それはムラの民主化という一つの流れにおいて問題とならざるを得なかったのだ、と人びとはいう。

このように、大久保耕地と報徳部落・小和田部落の生活変化は、一方は農業を中心に、もう一方は林業を中心にして、都市化の受けとめ方を異にしている。ムラは、時代の流れとともに変化してきた。しかし、容易には変わり得ないものもあるのではないかと思われる。それは、ムラの人びとが、よりよい生活を求めている、相互の結びつきに対する『こころ根』にみることが出来る。

小和田部落では、農地改革によって、ムラの人びとは各各の田畑を私有することが出来るようになった。この頃に、青年団・和楽会（四〇才前）・壮和会（四〇才後）・婦人会・老人会・消防団および自治会が組織され、ムラ全体の生活を保障するべく機能していた。

大久保耕地での『生活改善運動』（昭和五〇年八月よ

り実施)は、生活慣習、儀礼の簡略化を計るものであった。兼業化への移行により個々のイエの経済的独立が可能となり、ムラとして共同体的紐帯を必ずしも必要としなくなったことから、ムラとしての新たな生活慣習、儀礼へ向けての運動であった。この点に関しては、経済的独立によって各各違う生活の場がもち得る人びとの生活を考えるならば、どこか矛盾しているように思われる。

生活が一応安定したにもかかわらず、人びとの生活を保障するものは何ひとつ持たない。それは現代社会に生きるわれわれも同様である。人びとは「保障」に関してこれまでと全く同じ立場に立たされている。保障がないならば自らの力で生活安定の維持を計らねばならない。しかし、個人個人が現代社会のなかで自らの力で生活安定の維持を計ることは容易なことではない。だから、たとえ『幻想』でしかなくとも、共同体的紐帯により、生活安定の維持を計りたいと志向するのではないだろうか。生活改善を打ち出すことで、大久保耕地の人びとは、新たな結束を持ちたいと願っているのである。ムラの共同的生活そのものの内容は確かに変化してきてはいるが、生きて行くために今一度共同体的つながりを求める人び

との『こころ根』には、変わらぬ『ムラ』への憧憬が混在しているように思われる。

農作業を営んで行くうえで人びとは『イエ』の生活維持のための共同体的と、『ムラ』の生活維持のための共同体的とに、注意をはらってきたのだろう。ムラは、このバランスを保っていた。今日、人びとの経済的独立によって、このバランスが崩れてきた。大久保耕地での『生活改善運動』は、このバランス再構築へ向けての人びとの『こころ根』の発露と考えるべきかもしれない。

ムラの共同的生活は娯楽的要素を多分に含まざるを得なくなっているが、お互いのコミュニケーションを深めることによって、ムラとしての精神的つながりをなんとか保持しようとすることは、今日の時代的、社会的状況からすればその必要性をなおのこと認めざるを得ないのである。

けれども、今の生活をより合理的なものへ、より快適なものへ、と志向するならば生活様式(仕方)も変らざるをえないだろう。そうした志向は、過去においてもあったし、今日、そうした生活への志向が強くなったとしても何ら不思議なことではない。一方では、意識すると

しないとかかわらず、生活様式は全体社会の動向（大きなうねり）とのかかわりのなかで変化して行くものであり、それは止め得ようにも止め得ないものであろう。こうしたムラの変化に対しては、現代を生きるわれわれは全く無感覚で、「老人は孤独です」と話されたお年寄りが一番『痛み』として感じていることであらう。

「世のながさが、こういうものだし、これがあたりまえだと思っていたし、今でもこうして暮している」というお年寄りの言葉に、生活様式が変わり、時代が変わろうとも、人がその社会のなかで生き抜いていこうとする人びとの強さに、われわれは昔も今も変わらないものを認めざるを得ないのだろう……。

（板垣恭子・江藤仁教・戸祭浩）

二 農業の変質と兼業

戦後の経済発展、特に昭和三十年代以降の高度経済成長を経て、農業就業者数は急激に減少した。私たちの本年の調査地である大久保耕地（長野県上伊那郡宮田村）小和田地区（東京都西多摩郡五日市町）についてみると、農業収入よりも農外収入の割合が多くなってきている。

両地域で通年型の兼業化が、戦後特に著しい。兼業化をもたらした外的要因の一つは、鉄道（飯田線、五日市線）の開通によって、他地域への足が広められ、勤め先の範囲が拡大したこと。二つ目は隣接地域に、高度経済成長期の工業化の波をうけ、小規模ながらも精密機械工場、パネ工場、レンズ工場などが建ち、ムラの労働力を吸引したことがあげられる。このようにして、ムラの労働力は農外収入を求めて外へ出ていった。

大久保耕地は戦前までは、米と藁が主体であった。しかしそれだけでは生活が苦しかったので、ムラの男達は諏訪の寒天屋などへ十二月から三月にかけて、出稼ぎに行っていた。女達は米を入れる俵を作ったり、はた織り、糸取りなどをしていた。娘さん達は、岡谷の製糸工場へ働きに出ていて、ムラに帰るのは五月の農繁期、盆、正月ぐらいであった。養蚕の最盛期は昭和八年から九年頃で、その後化学繊維の普及によって養蚕は衰退し、桑畑も不要となったし、普段工場に勤めていて、農繁期にだけ工場を休んで農作業に従事することは、昇給とか出世にとって不利益であるという考え方や、マスコミなどの誇大情報によって、価値観に変化が生じて来た事なども

原因して、通年型の兼業が定着して来た。農地を所有していて、農作業の合理化なしでは通年型の兼業は望めない。この兼業化＝農作業の合理化は、定着的生活様式と近代的生活様式の妥協であるといえる。これ以外に、収入増によってもたらされる豊かな生活は、実現不可能であった。昭和四十年代の後半から「農業構造改善事業」計画の実施によって、桑畑を水田に転換した。現在の水田もその当時のものが、大部分である。これより以前は、耕地内の水田面積は多いというほどではなかったが、水不足に随分悩まされたようである。耕地は東に天竜川、南に太田切川を控えているけれども、大掛かりな用水施設の整備を前提としなければ、水田に転換可能な土地がほとんどであったのだらう。大型機械の導入を目指して、一枚の水田面積が拡大され、農道も拡幅整備され、用水路もコンクリート舗装された。それゆえに今は大型機械、化学肥料、農薬の大量使用によって、道普請、田植え、稲刈り、脱穀作業における労働交換、共同作業も少なくなり、農作業の実労働時間が短縮し、兼業化が可能となって来ている。

小和田地区は、水田はなく麦作を中心とする畑作地帯

である。現在は大豆・大麦・小麦・サトイモなどを畑で作っているが、かつてはほとんどが桑畑であった。養蚕は大正末期から昭和十年頃が全盛期であった。ムラの人々は養蚕をし、織物をしていた。その織物は「五日市の黒八丈」として、全国的にも名の通ったものである。それを八王子などの問屋に卸し、収入を得ていた。米がとれないために、それを米と取り替えたり、町で買っていた。昔は「女は織物、男は山仕事が農家……」と言う。山仕事は農閑期に行なっていた。そのほかにイカダ師にもなることがあったらしい。五日市を貫流する秋川では、漁業が行なわれていたので、漁師をすることもあった。しかし昭和四年頃に多摩川の登戸にダムが出来てからは、天然のアユがのぼってこなくなり、その後は放流をしていたが、現在では釣り人に入漁券を販売する程度である。ムラにおける生業は幾種かみられるが、現在でもかつての姿が残っているものは、ほとんどない。大久保耕地のある老人は、現在は養豚をしているが、これまでに養蜂・採種（花類の）・畜牛・養鶏などを手掛けて来たそうである。そのほかに養蚕も稲作もしたであろう。養蚕が衰退してしまうと、稲作のほかに畑作としての、主幹作

物がなくなってしまう。農業経営のむずかしさは、時代に合った農作物の選択のむずかしさにある。五日市線の開通と、畑作だけの農業という貧しさが原因して、一家の柱である壮年層の大部分は、外に働きに出ているか、もしくは自営業である。畑作は水田に比べて、品種も多いいけれども、それだけにまた機械化が困難であり、価格も不安定である。そのためか、畑は老人達の職場と化している。

両地域において、農業が兼業化し、しかも農業よりも他の一方の職場が主体となっている。この理由として様々なことが考えられる。内的要因として安定した収入、現金の必要性、豊かな生活、重労働からの脱出など……。しかも農業が、兼業化の方向へ進んでいることは確かである。

兼業が進んだのは、全国的に見て、昭和二七年頃であり、両地域に多少ずれはあっても、ほぼ同じ頃だと考えられる。現在の兼業のあり方、大久保耕地でいえば、農業と工場勤めは、それぞれ通年であるが、これは過去にもあり、決して今はじまったことではない。大久保耕地でいうと、米づくりと冬場の寒天づくりへの出稼ぎ、小

和田地区の林業とアユ漁、あるいは織物など、一方が通年でない違いであって、農家が米づくりだけで生計を立てていたという例は、特に最近のことである。これも大規模な土地を持つ農家に限られる。この農閑期だけの労働が、通年に変ったというだけであるが、ムラ人の意識は兼業によって大きく変った。一つは、農業収入よりも商工業の収入の方が、はるかにいいことを知ったことである。ある老人は、工場勤めをしている息子の収入を聞いて、「百姓仕事がアホらしくなった」と述べていたが、このことは、農業についての老人達の意識を大きく変えたと思われる。二つ目に、八時間の労働でも生活してゆくことができ、そして余暇というものがある、人だけに与えられるものではなく、すべての人が初めて余暇というものをも、満喫することができるようになった。日曜日などの農事視察、旅行等にも気軽に出席することが、ごく自然のこととして定着している。

かつてのムラにあったムラ人の共通意識、相互扶助と、その基礎にあたる共通の利害関係にしろ、仲間意識は、それぞれ、農業という共通基盤に立っていた、同じ職業を持つ人や同士の共通感情であったわけであるが、それ

は兼業化というもので、次第に消えて来た。それぞれが違ふ仕事に就けば、共通の話題はなくなり、また互いが必要としなくなる。収入の増加を目指したともいえる農業の合理化は、兼業化を可能とし、それによって人々の生活は豊かなものになった。兼業は、農民に様々な職種を与え、それによってムラ人は様々な意識を持つことになった。それとともに、新しい世代の登場、経済成長期に生まれた老人達の孫達は、このような意識を持った父のもとに育った。

老人達は言う「今の若い人とは話しが合わない」と。老人達は家を、土地を中心に生きて来たのに対し、彼らの息子らは、家を単なる住まいとしてしか見ていないであろう。けれども息子らは、農業は見捨てなかった。しかしその孫たちの代にはどう変っていくだろうか。農業に魅力がないと見られがちな現在、孫たちが離農していくのは自明の理であるのかもしれない。この世代間の意識変化は、老人達が体験した戦後の農地解放と同じほどの、大きな意識変革かもしれない。

高度経済成長は、兼業化を促進させ、兼業はムラにおける職業の多様化をもたらし、同時にまた農民の農業に

対する意識をも変えた訳であるが、さらに職業、すなわち労働に対する意識が全く異なる世代を、育てたのではないだろうか。

農作業が機械化され、化学肥料、農薬の使用によって、農民は重労働から解放された。たとえば土起こし、田植え、草取り、稲刈り等がある。そして、兼業化したことによって、収入も安定して来た。しかしその反面、あまりにも農業が工業的になって来ている。たとえば「機械とか化学肥料、農薬に頼っても、手間ひま掛けた時と同じ程度の収穫があるのだから、よいではないか」というような言葉を耳にする。つまり、米は兼業農業、日曜農業でも充分に作れるけれども、そこには何かが欠けているような気がする。大久保耕地で、稲を手植えで行っている水田を見た。稲の生育については外見では、差異はみられなかったがそこに農業をしている人の意地を感じた。つまり機械植えよりは、日数も掛かり、労力も掛かるであろうが、みずから種を播き、自分の手で苗を植えるのだという意気込みを感じたのである。ここには少なくとも採算だけを問題としない何かが生きている。周りの人たちの間には、これを道楽や趣味と見る人もいる

だろうが、現在の農業はあまりにも機械、化学肥料、農薬とかに頼ってしまい、生命体の成長を見守り、育んでいく農の心が失われてはいないだろうか。人間は自然の中に生き、自然に頼って生きている。特に農業等においてはそうであろう。農業が機械化、化学肥料、農薬の大量投入などによって、農業の対象とする生命体が工業対象と同様に扱われる傾向が増し、そのことが結局、自然を裏切ってしまうことにならないだろうか。兼業化の過程の中で農業は変質を余儀なくされてきているが、△の営み▽の本質部分まで変わってしまったならば△農▽の破壊である。農民主体の復権の条件が探し求められなければならない現実である。

(大向正吾・長田安弘・十二村良二)

三 大都市近郊山村における生活条件の変化

大都市東京の近郊町・東京都西多摩郡奥多摩町は、昭和三〇年、古里村、氷川町、小河内村の一町二村が合併し成立した町で、面積は二二・六平方キロ、東京都全体の一〇%を占める広大な地域である。人口は昭和五一年現在、一万四四九人で、昭和二八年頃のピークを一〇

〇とすると、六六程度に減少している。平均気温は都内よりも低く、雨が多い。平野部がほとんどなく、峡谷型山村である。東部は青梅市に、西部は山梨県に、北部は埼玉県に、南部は松原村、五日市町に接し、町の中央を多摩川が流れている。町の海拔は平均五八四mであり、海拔三〇〇〜八〇〇mの地点に人家が集中している。主な産業には農業、林業、水産業、鉱業、観光業などがあるが、昭和三〇年頃まで町の中心産業であった山林業は衰退しており、また大規模の事業所もないため、町内での就業機会も少なく、若者を中心にして他地域へ働きに出ている人が多い。私たちの班が調査したのはこの奥多摩町の小河内、日原、大丹波の三地区である。

小河内(峰谷)地区は今回の調査地区の中で、もっとも地域開発が遅れた地区であり、地理的条件にも恵まれていない。地区内には中心となる産業がないので、若い人を中心として、都会に働きに出ていく人が多く、人口も減少している。特産品としては「ワサビ」や「キノコ」栽培などがある。また小河内ダムの上流に当るため、自然保護(水質保全)策が地域の開発を進める上で障害となっている部分もある。この地区の今後の開発の方向

については、地理的な位置や地形条件にも恵まれておらず、また自然保護（水質保全）策が一定の規制を加えているため、町当局はもとより住民自身も、いかなる方向をとるのが望ましいのかと、現在模索している状態である。観光開発については以前、都民休暇村の計画があったが、これも中断されたまゝになっており、大きな期待は持てない状態である。現在のまゝでは人口は減少してゆくと思われるので、今後産業の振興と就業機会を創出し、生活環境条件の整備を中心とする強力な政策の望まれる地区である。

且原地区の場合も交通、医療、子供の教育などに問題があり、若い人を中心として他地域に働きに出ていく人が多い。しかし「奥多摩鉱業」という石灰石を掘り出している会社があり、また「日原鍾乳洞」を中心とする観光が盛んであり、この二つの産業によって雇用の機会と収入はある程度確保されている。特に鍾乳洞による観光収入の多くは地元で還元されている。中心となる産業の確立していない町内他地区と比較すれば、恵まれている地域環境であると云える。またこの地区でも山林業の再興を望む声が聞かれた。

大丹波地区にしても昔からの中心産業であった山林業が現在では衰退しており、決して問題のない地区とは云えないが、他の二つの地区と比較すると、地理的位置に恵まれ、交通も便利で、観光（ます釣）を中心に安定している。この地区の住民は「ます釣場」という観光施設を作り、観光業という新しい産業を成立させ、現在ではかなりの利益を得ており、これによりこの地区での人口の急激な減少は見られない。勿論若い人々を中心として就業人口の七割が都会に働きに出ているが、この地区から住居まで移してしまう人はほとんどいない。都会は住みにくいという意識が強いせいもあるが、地理的位置の有利な点とマイカーの普及が、人々にいわゆる「サラリーマン生活」を可能にしているのである。住民意識も都市化しつゝあるようである。子供の生活実態で特徴的だったのは、「塾」に通っている小・中学生が多いことである。ただし学習塾に通う子供は少なく、いわゆる「おけいこごと」を習っているものが多い。こんなところにも都市の影響がみられるようである。この地区にしても数々の問題があるのは事実であるとしても、日原や小河内と比較すれば、まだまだ恵まれている地区であらう。

しかし林業関係者は、昔からの中心産業であった林業の再興を強く望んでいるのである。

こうして以上三地区をみると、次のような共通の問題点を見いだすのである。

一、社会・生活環境の未整備（道路整備、し尿とゴミ処理、医療施設など）

二、交通問題（鉄道、バスの運行など）

三、林業の衰退（輸入木材による圧迫、労賃の上昇など）

四、教育問題（通学、義務教育施設の改善、都立高校の新設希望など）

五、若者の地域離れ（人口の減少や高齢化が生じつゝある）

奥多摩町はこれらの問題に対して「山村振興計画」により対策を進めようとしているが、その財政状態は厳しく、国・都の援助も多くは期待はできない。また町当局はその困難な諸問題にもかかわらず、地域の振興に対する強い熱意を持っているが、町全体が秩父・多摩国立公園内にあることと、都の上水道源地である小河内ダムをかかえていることから、多くの規制を受け、自由な開発をしかねていると思われる。今後、奥多摩町はこれら

の問題をどのように打開し、どのように変化、発展していくのであろうか。その地の人々のための望ましい変化が望まれる。

（清水祐司）

四 婚姻儀礼の変容

戦後の政策の中で、それまで「財閥」と呼ばれた山主と、山仕事を手伝う「手ビト」との関係が一変したため、更に、昭和三十年代以降の経済成長により都市に労働力が集中したため、それまでの地域の社会生活が困難になった。消防団、共同作業、部落内の行事に視られる伝統的な部落の「共同性」が変化・衰退してしまった。人びとが他産業へ移動したのである。

こうして、配偶者の選択も「ムラ」の中にとどまらず、本人の自由な意志による選択へと変わってきた。「今のように、一緒に歩くなんて考えられなかったし、芸能人のように昨日結婚したかと思うとすぐ別れてしまうなんてことは考えられなかったし、恥かしくてできやなかった」とは、日の出村の婚姻儀礼を伺ったお年寄の言葉である。「結婚式当日になって初めて顔を見た」と言われる明治生れの話者には当然のことであろう。

昔は、縁談は家格のつり合いを考えて進められ、親が最終決定をされるとされていた。行商人の役割は、『ハシカケ』と言われる口火をさる程度で、仲人は婿方より選出された。「見合い」もあったようだが、世話人がいるというだけで実際の見合いは行なわなかったという。中には、一里以上も離れた娘の家へ夜出かけて行くものもいたという。

結納は口がためと言われ、身元を確認した上で嫁にもらう約束をし、五品から七品を結納の品として差し出し、御世話人（媒酌人）には隣組の組長に依頼した例が多い。婚礼は、まずたちぶるまいより行なわれる。

本人・媒酌人・親戚総代・隣組代表の最低五人が嫁方へ提燈を持って嫁を迎へに行く。

嫁方では、隣組代表と親戚全員を呼び、夕方、宴を催し礼をつくし、嫁方の媒酌人による送りのことばで送り出す。嫁は勝手口から入るが、その際門前で、小学校入学前の男児・女兒の盃をうける。白に腰を降ろし、落ちてくようにというような風習も残っている。

式は婿方の座敷を使い、上座正面に媒酌人が、両側に婿と嫁は向い合って座り、相方縁者は血の濃い順に座っ

ていく。初めに三三九度の盃を、次に親子盃、兄弟盃へと移り契りをかわし、最後に、バラバラに蒔いた種が最後は根をはる意味から「嫁のお茶」が出て、家族の一員としての証認を得る。

当日の準備には、隣組の人が高膳を一人づつ出し手伝いに当たり、嫁のために、ホーライサンといわれる一番太い大根で男根を作り、それに「寿」と書き、鰻・亀の飾りを付け、嫁の席に用意したそうである。式と披露宴が済むと門おくりと言われる送辞で二人が参列者全員を門まで送る習いで当日を終える。

婚礼の翌日、「進上」とよばれる村中への挨拶回りをする。それは、村入りとしての行為であろう。

里帰りは、ミツメと言われる三日後と、髪洗いと言われる一週間後であり、仲人へのお礼と、婚礼時の髪洗いのために実家へ帰る。

このような儀礼をもって婚礼が進行するが、やはり、二・三男よりも長男の時が盛大であったという。

このように、親の決定する相手と婿方の家で親戚を中心とした参列者を中心とする婚礼が以前にはあった。しかし、今日では、式・披露宴も家以外の場所で行なわれ、

婚礼そのものも、昔ほどの形式もなくなり、本人同志の意志が尊重されるように変わってきた。

この点、簡素化を目指した長野県上伊那郡宮田村に人前結婚式といわれる婚礼の形態を見ることが出来る。それは、生活の合理化のため、十六名より構成された生活改善委員より組織された生活改善運動の中に織り込まれた申し合せ事項の一部であり、分館長と各耕地から選出された十一名で組織する結婚実行委員会の下で婚礼全てが行われる。司会は委員長であり、会費は二千元、会場は宮田村福祉センターである。当日の食事は農協の生活センターに依頼し、招待客は最小限の人数とし、引き出物・記念品等は出さない。参列する女性の服装は華美になつてはならない。嫁の衣装替えは三回以内とする。式の前夜の祝事には、近親者のみ参加し、一般者の出席は見合わせる。式そのものは日章旗の前で行われる。

以上の事項が婚礼に関するものであり、その他、成人式・入学式・葬儀等に関する事までも細則が申し合はされている。この生活改善案が作成されたのは五十年であり、まだ全てが完全に実施されてはいないが、生活の中心にどう侵透していくかは未だ明白ではない。

他市町村の配偶者として行なわれる結婚式では、前記事項も形骸化し、お色直しや引き出物にも未だ他の家を意識せざるを得ないようである。自由な恋愛結婚が行なわれている、式・披露宴が「家」の名を用いて行なわれている商業主義に乗った式場の利用にもさほどの抵抗を感じない今日の婚礼の在り方からも、まだ「イエ」が生きていると見て取れる。家の新築に際しても、「人寄せのできるように」と広い空間が使える様に設計され建築された家を見た。「イエ」を囲む情況が急速に変化しつつも、それを支える人々の心の変化は遅く、意識としての変化も顕著には現われにくい。

五 子どもの生活としつけ

成木は青梅市の北方で埼玉県との境に位置している。成木尾根と白岩尾根の谷間で、唯一の交通路である都道が成木川に沿って蛇行しながら、東西約六キロにわたって走り、その川を中心として数えるばかりの民家が点在し、いまだ一台の自動販売機すらない山村地域である。昔は林業と、石灰を中心とした生活が主であったが、社会変化と共に経済的な面で現在では、専業で林業を行っ

ている家は二軒になっている。他のほとんどの人は、市内、あるいは市周辺に勤めに出ている。

成木には成木六・七丁目を学区とする青梅第九小学校がある。今回調査した家庭の全ての子供が、この九小に通う。九小は、その全校生徒数は三十八名、その内、六年生が八名、五年生が二名であり、この数を見ただけでも都会の小学校に比べ、極端に人数が少ないことがわかる。

九小は、この小人数の關係から校庭が狭くなっている。子供達はのびのびと動きまわれない。せめて子供達が自由に運動できるくらいの広さが必要である。このことは、調査の時に子供の母親からもでた問題である。三十八名という小人数制で教育している九小であるが、この小人数制には、利点があり、そして問題点がある。人数が少なれば先生が個別に、こまかく子供達を指導できる利点があり、先生と子供が密接にコミュニケーションが行なわれている。しかし、反面、小人数制のために競争心を起こさせる要因もなく、子供は引込思案になつてしまふ、無口になつてしまふという問題が起きる。そして刺激がなく、先生の目がとどきすぎるために自主性が失なわれてしまうこともある。九小から中学へ進学し

た子供は小人数制からいきなり多人数クラスになるので一学期間ぐらいは気疲れするそうである。こうみると、都会の多人数クラスの勉強競争も考えものであるが、小人数制というのは、利点よりも問題点の方が多いようである。小人数制、多人数制の問題はどちらともいえないむずかしいものである。

成木には、都会の塾ラッシュなど無關係で一つもない。子供のほとんどの母親は、もし塾があるならば通わせたいと考えるが、強制的ではなく、あくまでも本人の意志にまかせるという考えが多く、なかには学校の勉強の量だけで充分であると考え、塾の必要を考えない母親もいた。塾がないから、子供達はのびのびと遊んでいるかと思うと、又、そうでもなく、公園などの遊び場もなく、子供どうしの家が離れているために、遊べず、お互いの家に行くこともなく、家にとじこもり、テレビを見ているのが現状である。親の話では、ほとんどの子供はテレビを三時間以上見ているということであり、内容はマンガが圧倒的に多いようであった。都会の子供はＴＶ子というが、これは成木にもいえそうである。

成木に行くには、東青梅駅からバスに頼るしかない。

駅から終点の区間は約二十五キロある。このバスは九小に通う先生にとっては唯一の交通機関である。しかし、この交通機関のために問題も起きている。それは、駅から成木に行くバスは少なく、一日に数えるくらいしかない。そのため、九小の先生は授業が終わると、バスの時間にあわせてすぐに帰ってしまうということ、いわゆる教師のサラリーマン化である。これは都会にとどまらず成木にもあったのである。早く帰ってしまうため、地域住民との結びつきを薄くさせてしまうと共に、あくまでも時間中心とする機械的行動となってしまうのである。成木の付近は山地であるので、冬に雪でも降れば、バスにも影響を与え、この問題はさらに深まるであろう。又住民が買物に町まで出かけるにも不便である。これ等の問題のためにも、即刻バスの本数を増してもらいたいものである。しかし、もしバスが増えても教師のサラリーマン化がなくなるかどうか保障はない。

バスの終点は上成木であり、その一つ手前が九小である。上成木から今回調査した一番奥の家までは、大人の足で歩いてもかなり遠い距離であり、その奥の家から通っている小学生は、毎日九小まで四十分かかって歩いて

いる。バスを延ばせといっても、とてもバスが通れる道幅ではない。山村の宿命としかいいようがない。

成木は、市行政の緑地区域であるため、今後、本家から子が独立（分家）することによってしか住宅、人口が増えてゆく道はない。従って、この市の行政が今後行なわれてゆくことによって、市から隔離されてしまうと共に、次の世代を担う若者達が外へ出て行ってしまうのではないかという行政上の問題と、そのことによって昔からの産業が減っていくのではないかという問題が、現在よりかかってきている。

親子での外出についてみると、どの家庭も一緒に出かけるのは父兄会ぐらいで、時には立川方面に買物に出かけるらしいが、一緒の外出はあまりないようである。九小への希望としては、先ほど述べた教師のサラリーマン化を何とかしてほしいという声が多かった。そして、無理のない教育をしてほしいということも多かった。又、成木への要望として、医者がほしいことや店がほしいこと、子供の遊び場として公園があればということがあった。親子での会話は、九小が小人数のためか、家でもあまり話さないとのことであった。

成木を訪れた人ならば、誰でもがその自然や地域の山村であることに驚かずにはいられないであろう。そして一瞬ここが東京都なのかと、とまどうであろう。道なりに流れる成木川の水の美しさは、今の現代人が失いつつある何かを映すようである。しかし、確かに成木は東京の一部であることは事実である。「昔から隣の人が親戚だ」と言う、ある人の言葉が印象的であった。そして今も屋号の方が通じるという。すでに都会では忘れさられ、消えたものの数々が今も成木には残っているような気がした。都会のように人数が多ければ問題も起きる。反面、少なければ又別の問題も起きてくる。成木もしかりである。都心へは遠すぎ、かといって完全なる山村でもない。青梅などは買物の圏内である。だが、現在成木の山一つ越えた埼玉などの方が、より一層鉄道で都心と直接結びついており、間の成木がポツリと置き去り状態になっている。そんな成木の中で、今の子供達はどう成長してゆくのであろうか。成木の林業に将来はないという。これから子供達の成長と共に、成木の周辺も良い意味、悪い意味もふくめて開発され、都心に近い所となって行くだろう。今より成木が栄えるのは時間の問題であり、そう

すれば、今の子供達の求める刺激も多少なりに、身近になるであろう。成木が栄えることは住民にとっても喜ばしいことであろう。しかし、その時点で必ず新たな問題が、何等かの形で起きるであろう。緑が失なわれつつある都会の現状が、いずれ成木にもおしよせてくるのである。今の子供達が成長した時、その状況の中で正しい成木という場所を考え、街か自然のどちらかを選ぶのであろう。できれば地元の希望である、あのすばらしく恵まれた環境を生かした、水と緑の産業を実現することを願って止まないものである。

(後藤秀雄・杉田秀二)

六 住まい・医療・食生活・祭りにみる変化

我々は地域における文化を、その土地土地に住む人々が長年にわたって日常の生活から体験によって習得し、築き上げ、今日の姿へと形作った生き方、従ってその土地土地の地域的・歴史的・社会的背景をもった生活そのものであると考える。そこで我々は長野県宮田村大久保耕地、東京都五日市町、日の出町において住居とその住まい方、民間医療、食生活、祭りという文化を形成する

いくつかの側面を取り上げ、今日における都市化に伴う生活の変化について考えた。

住居は我々人間にとって最も日常的な生活の場、それ故今日では都市化の波の影響が最も明確に形（住居形態）、機能（住まい方）の変化として現われる場である。日本の経済成長が都市にだけその利益をもたらし、生活水準を上昇させたのに反し、農村だけが長い間、取り残されてきたことによって生じた生活の格差を無くそうとしてきた農民の願いと努力がこの住居へのイメージに映し出されている。大久保耕地の住居にもこの願いと努力、都市化に快適な暮らしというイメージが映し出されている。住居自体は農作業から切り離され、住居本来の姿である人間優先の立場を踏まえた、人間的な生活を送る場、人々が毎日の労働から肉体・精神の休息を求める場になつて来ている。

耕地に現代的な住居をもたらしたる要因をみると、養蚕の中止による室内使用の廃止、作業場の独立、農労働の機械化による労働時間の減少、工場就労による現金収入の定着と生活時間の固定化、農家世帯の核家族化、住居に求められる機能の変化などがあり、これらが住居の構

造・機能の近代化を人々に要求させ、うまく噛み合い、現代的住居への改善に好条件を生み出していったのである。

だがこれらの要因は構造改善事業によってもたらされたのである。大幅な機械化の水稻集団栽培による収穫量増加、花卉の大量温室栽培などを加えた共同多角経営による収入の増加を短期間に実現させ、生活水準をもそれに伴って急上昇させた構造改善事業は、まさに都市化への扉を開き、耕地の発展をもたらし、人々が長い間求めていた快適な暮らしを実現せしめる画期的な改革であった。

大久保耕地では、構造改善事業により都市化への発展が短期間に進み、そのため人々の意識の中に都市化による考え方の変化が、ある面において特に強調されて起こったのではないか。それが今日の大久保耕地の人々の物の見方、考え方を左右する程の影響力を持ち、これからの大久保耕地の発展の仕方にも影響を与えていくのではないかと思われる。

病気や怪我に対する民間医療は、どの地域にも古くから伝統的にあったが、医療施設の出現、国民保健制度、

老人無料制度、そして医学の飛躍的な進歩によって變ってきた。それは大久保耕地や五日市町、日の出町においても言えることである。

大久保耕地では、富山の薬売りが毎春定期的にやつて来て、一年間置いておいた薬を新しい物と取り替え、使用した分の代金だけを受け取っていく。これは現在でも行われているが、最近では農協が化学薬品を一括購入するので、そこから買ってきて使うことの方が多い。宮田村に個人病院が出来たのは三〇〜四〇年前で、それまでは手に負えないような病氣や怪我のものを、駒ヶ根と伊那市にあった中央病院までつれていったが、よほどの病氣や怪我でない限りは医者にかからなかった。ハシカは医者にかからず、各家庭で看護し、子供のカンの虫は木曾（現在の西筑摩）へおまじないをしてもらいにいった。現代ではカゼをひいてもすぐ近くの診療所へ行く。その方が確かだし、手っ取り早いからだという。薬草はゲンノシヨウコ、カワラヨモギ（大田切川の河原に生えている）などが取れ、血圧にでも何でもよく効き、特に最近では薬屋も取りに来るようになった。

日の出町新井では、昔から近くに医者がいて、各家庭

で治療したりすることはあまりなく、大正時代には大久野のヤマキタに医者がおり、重病の時には秋川のシキダの有名な漢方薬の先生まで通った。大正末期から昭和初期頃に個人医院があり、腹痛やカゼなどの時はよくかかり、昭和初期に出来たセメント工場の会社にも病院が出来た。現在は個人病院が一つと、主に老人を収容する日の出病院、大久野病院、セメント会社の病院の三つがある。また此の地では昔から養蚕が盛んであったこともあり、カゼをひいた場合には、真綿を首のまわりに巻いたという。薬草は山ではゲンノシヨウコとドクダミが取れ、昔から使用され、ゲンノシヨウコは干したものを煎じて飲むと、非常に苦いが、腹痛などによく効き、ドクダミは腫れ物やおでこなどにつけるとよく効く。

大久保耕地、日の出町においても、こうした薬草は昔から重宝され、病院や薬局の薬と比べると効目は遅いかもしれないが、身体に影響を与える副作用などの心配はなく、現在改めて見直されている。

生活の中心となる食生活も、生活条件の都市的生活化という流れとともに大きく変化した。まず味噌としょう油の製造についてみると、昔は大久保耕地においても、

五日市町、日の出町においても、必ず自分の家で独特な物を造っていた。各班ごとに一つの味噌がまがあり、それで味噌を造った（現在大久保耕地に味噌がまはあるが、葬式の時、うどんをゆでたり、洗い物をするためにのみ使われている）。昔は近くで売っていなかったので、自分達で造らなければならなかった。また自家製の方がおいしかった。吟味された材料が使われ、各家庭の味がそこに現われていた。しかし現在は日の出町では数軒、味噌を造っているだけだそうで、簡単に品物が手に入るようになり、わざわざ時間と手間をかけて造るような、めんどくさいことをする必要がなくなり、その時間と労力を他にまわした方が有効だからである。生活の合理化とすることである。おそらく現在日の出町でまだ味噌を造っている家も、近い将来には造らなくなり、既製の味噌を買うようになるであろう。

大久保耕地の食生活に大きな影響を与えているものに農協がある。農協の車「ひまわり号」の週二度の巡回販売によって日常生活品はほとんど間に合い、家庭での食品の長期保存の必要がなくなり、また今までの自家製のものは既製品で間に合うようになった。

また長野県といえば有名な漬物も、昔は家々に代々伝わってきた材料、製法で、母から娘へ、姑から嫁へと伝わってきた味をもっていたが、現在では一定時期になると、農協が有線放送で造り方を指導し、人々はそれを聞いて造る。こうして人々の食生活は農協により変化し、便利なものになったが、各家が代々持ち続けた味噌など加工食品の作り方、保在技術や味などの伝承は既に失われてきているのである。

祭りにはいつの世においても、時代と場所が反映し、生きている人々の生活が浮彫にされている。日の出町新井においても、祭りはそこに住む人々全体の年に一度の華やかな祭典だった。しかし、最近はどうであろうか。

日の出町新井の氏神様、白山神社の行事には二月十七日の記念祭、四月十七日の神皇祭、六月三十日の水無月の御抜い、十一月二三日のシンショウ祭などがあるが、最大の行事はやはり九月十三日の祭りで、その中心となるのは、昔は組長、戦時中は部落長、戦後は先ず区長というように変り、現在は自治会となっている。しかし最近、祭りの開催ではなく、その開催日がよく問題となる。千年の伝統をもつ白山神社とムラ人たちの間には、長い

間つちかわれてきた何らかの言習わしがあったからこそ昔からの決まった開催日が伝統的に受け継がれ、その日に開催すること自体に意義があるのだが、平日であると参加しにくいので、敬老の日や休日にした方が良いでしょう。新井という地域にサラリーマンが増加し、地場産業従事者が減少してきたからである。

祭りは年々さみしくなっているという。楽しみの少なかった昔、祭りはその楽しみの、しかもムラ最大の行事として結束して盛大に行われていたが、現在のように娯楽も増え、参加する人々の意識にも変化が生じ、昔、祭りの中心となり、素人演芸などで活躍した青年団組織のなくなった現在では、祭りは殊更に価値あるものとは思われなくなってしまう。こうして祭りは昔ながらのしきたりにのっとり、行事として行われているが、ムラ人たちの祭りに対する考え方は、時の流れとともに変化し、昔のように結束した民衆の力、意気込は見られなくなつた。

だがこうした祭りに見る現象、地場産業従事者の減少と労働者の流出、特に青年層の空白化、組織力の変化と

いった現実による祭りの衰退は日の出町新井だけではなく、五日市町、宮田村大久保耕地においても、根本的には日本の現実の姿として見られるのである。

以上生活文化形成の四側面を三地域においてみたが、何れも合理化、近代化、都市化という変化をとげようとし、とげつゝあり、この現実はこちらの村や町だけで起こっているのではなく、日本全体社会の変化の現われである。個々の村や町はそれぞれ囲りの社会、日本全体の変化に常に影響され、その受けとめ方、その反映のさせ方によって地域性を生み出してきたのであるが、現在の姿は日本全体社会の画一的都市化、近代化として地域性を消し去りつゝある。このことは夫々の地域に合わない、よりよい生き方、充実した生活をもたらずであるうか。我々もこの変動、画一化に左右され、生きている限り、我々自身の生活をみつめ直す必要があるのではないだろうか。

(加藤峰幸・高橋 仁・田原良子)